

私はなんとか生き残れたが、三月十五日、再び中国共産軍に捕らえられ、運よく十六日には逃走した。

私はここで、大和田と二人、平陽開拓団の集団が阿城方面に在るとの情報を得たので、五常より鉄道線路の上を歩き、十九日の午後八時頃に阿城に着き、日本難民収容所本部を尋ねて、平陽開拓団集団の収容所が阿城にあることを知ることができた。このときの嬉しさは言葉では表現できない。一時も早く行きたい。しかし、明朝でないと訪れることは出来ない。妻の生死は判らず、一夜を収容所本部で一睡もせず、翌朝平陽開拓団集団（团长井久保陽作）収容所を尋ねた。このとき井久保团长が「堀さん、奥さんは生きていますよ、男の子を残念だったが早産された。だが現在は高熱で寝ておられるが、元氣だ心配はいらないよ」（召集のさい、妻が妊娠していることは知らなかった）と言われた。

七か月間余りの避難、逃避行の苦しみが一度に脳裏から去って行った。生きて逢えてよかった、と妻の手をしっかりと握りしめたあの時を今も忘れることはで

きない。阿城収容所は約八千人の北滿各開拓団の収容者があり、四千三百人余りが死亡したとか。八月三日阿城を出発、十月十二日博多港に上陸、戦前の軍需工場であつた近くの日本電工に就職。三十年余り勤務。現在妻と二人で農業に従事している。

ああ！満州

石川県 久木 孝 作

渡 満

私は昭和二年小松商業を卒業し、同四年一月、金沢第七連隊に入営、翌五年に除隊し、その年の九月に、満鉄経営の撫順炭砒の經理課へ就職した。

昭和六年満州事変が勃発して以降、石炭の需要が増大してきたので同十九年に牡丹省八面通の光義炭田の開発に移され、撫順から約百人が出張して当った。私は、その經理副科長として、二十年二月光義炭田に赴任した。

ところが、七月十五日、召集をうけ急遽、山海関の阜新の部隊に入隊した。八月八日、ソ連軍が越境し不法侵入したというので部隊は出動、十六日、国境の虎林につき八月十五日の終戦を知った。

二十日に部隊は解散となり、急ぎ撫順市の自宅に帰り着き、炭硯庶務課長付きとなる。

日本人居留民会

撫順市にソ連軍が進駐するというので警察署や市役所の職員は拉致されることを虞れて皆雲隠れして無政府状態となった。

私どもは、会社幹部会議を開き、撫順市民の避難について討議の結果、今、動揺しては却って命を縮める、全市民踏み止まり撫順を死守し、最後には家族ともども自決の覚悟と決した。

それに、宮本慎平炭硯長を、日本人居留民会設立準備委員長として協議し、九月十三日、私の上司、大石重義庶務課長を、居留民会長に就任、私はその副課長として、総務、渉外を引きうけ、全力をつくした。

避難民の救済

撫順市に日本人約四万五千人、満州人約三十万人、そこへ奥地の満鉄社員や開拓団員がなだれこんできたもの約四万五千人を社宅に同居させたり、各学校や寺へ集団毎に収容した。

避難民で健康な人はみな炭硯作業の労賃で集団毎に自活させ、衣類は市内在住の日本人から供出を願うなど、衣食住の確保をしたのである。しかし、その内、発疹チフスが蔓延し、バタバタ死んで越冬した二十一年の春には収容所によって半数以上の死者を出した。

ソ連軍の進駐

ソ連軍が進駐してくると、先ず銀行を接收すると聞いていたので、市最高幹部と、協議し、市内の銀行現金を有力個人に分散保管した。

他方、殺気だったソ連兵から、全居留民を助けるために女性から協力して貰いたいと一定の保証をして約四十人をソ連兵の接待婦になつていただいた。

予想通り、八月二十七日からザレスキー少将指揮下のソ連軍が続々進駐し、凡ゆる機関を接收した。しかし、文盲のダワイ部隊は日本人の家の手に上

りこみ、手当り次第物品を盗りあげる等、筆舌でつくし難い事件が毎日繰り返されたので居留民会への訴えが殺到し、私共は不眠不休で、その処理に當った。

八路軍の進駐

二十年の暮れから、ソ連軍に代つて八路軍がやつて来た。八路軍は、比較的規律はよかつたが、共產主義を發揮して、日本人の資産家を八路の兵舎に拉致して、「君の蓄積した財産は中国人から搾取したのだから、五十万持つて来い」、「百万円もつて来い」、と攻め立てるのである。

家族は、その度毎に民会へ泣きこんでくる。私は通訳の太田政治、杉原寅雄の両氏と貰いさげに交渉する。「日本人は現金はない。家財道具を売り払つて現金をもつてくる。三日間待つてくれ、民会で保留するから、本人を帰宅させてくれ。」と言つて釈放してもらうのである。部隊は一週間余り滞在して次の地点へ移動する。そのあと又々新しい部隊が来て同じことを繰り返すのである。私達はつくづく閉口し敗戦国民の哀れさは骨髓に達した。

国民政府軍の進駐

翌、二十一年三月二十日、国府軍が奉天方面から進撃して来たが、奉天と撫順間で、八路軍と戦闘開始の際、政府軍が民会に対し、負傷者を運ぶタンカ数百台準備せよとの要求である。そのあげく民会の事務所の中で拳銃二、三発発砲し、数十人を外に連行し、金品を強奪した。その盗賊兵のなすがままを咎めることもできない敗戦日本人の哀れさ。

幸い、満鉄社宅街は、厚田美寿氏が自警隊を組織して指揮していたので、その難をのがれた。私は民会の資金を持つて裏へ逃走し得たときの恐怖は今もつて身に沁みている。

公官借入金制度の設定

避難民の救済、進駐軍の接待、引揚準備等のため各地区とも多額の資金を要するので、その資金調達方法として公官借入金制度を、奉天の満鉄、北條秀一氏から連絡をうけ、大石会長と私が奉天に行き、その内容を聞いて帰り、早速実施した、一世帯五万円を限度に民会が借り上げ、日本へ帰国後、政府が返済するとい

うものである。

過労と発疹チフスで倒れる

私は、終戦以来、居留民会で昼も夜も東奔西走で心身の疲労その極に達しているところに発疹チフスにかかり、二十一年四月に倒れたが、加療よろしく一命をとり止め、七月引揚げに病床から這い出し、家族と入場光太郎氏に付添いねがい、コロ島、佐世保を経て、七月末、郷里小松市に引き揚げた。時に私三十八歳、家内歌子三十七歳、長男繁忠十五歳、長女睦子六歳、二男義則四歳の五人家族であった。

引揚以降

郷里に引揚げて以来、健康回復、二十一年十一月より露店商で古物商開業に家内が担当、私は県当局に折衝して、恩賜財団同胞援護会石川県支部の設置にこぎ着け、私は小松市の担当者となって引揚者、戦災者へ援護物資の頒布事業を始めた。

なお、昭和三十年から小松市議会議員となり、六期二十四年間つとめ、勲四等の受章に浴した。また長きにわたり、引揚者同盟石川県支部副会長として援護活

動につとめたことを認められ三池信理事長と中西陽一知事より感謝状を受く。当年八十三歳である。

あれから四十五年

岐阜県 後藤 英子

昭和二十年八月十五日、満州チチハルの社宅でたった一つ残ったラジオの前に社宅の人達が集まって聞いた「終戦の詔勅」のすすり泣きの声が伝わって来た。戦争に負けた。これから我々はどうなるのだろうか。

それからの私達の生活は逆転した。幸いなことに、主人は軍関係の自動車の会社勤めていたため、召集は免れた。社宅には、奥地から逃げてきた開拓団の方達を入れるため、二、三家族同居することになった。窓には板を打ちつけ、鍵は厳重に閉め、一步も外へ出られない。それでもソ連兵や中国人(満人)が鍵をこわして侵入し、目ぼしい物、特にソ連兵は時計、万年筆を欲しがって盗って行った。一年間の恐怖の生活、